

【書評】

滋賀県平和祈念館 編

『戦時下の滋賀師範：昭和18年の卒業生』

(サンライズ出版, 2016年, B6版, 186頁)

廣内 大輔

岐阜大学教育推進・学生支援機構

本書は、滋賀大学を構成する前身校の一つである滋賀県師範学校（昭和18年度からは官立移管して滋賀師範学校と改称）に学んだ若人たちの、先の大戦に翻弄された青春の記録である。副題となっている昭和18年の卒業生とは、昭和13年（第一部）あるいは昭和16年（第二部）に入学して、昭和18年9月に学び舎を巣立った若き教師の卵たちである。

本書は一般向けの書籍であるためか、戦前の学校階梯や教員養成のあらましが、教育史に馴染みのない者にも分かりやすく解説されるところから始まる。その後、当該年卒業生のうちの17名を主役級として紹介し、教壇に立つことを夢見て師範学校の門をくぐったはずの彼らが、いつしか「祖国のために生命を捧げる」べし（93頁）という時代の空気に自己を同化させ、陸軍特別操縦見習士官や海軍飛行専修予備学生へと能動的に進路を変更していく様を描く。すなわち、「生きて帰ってくるより戦死することの方が、忠君愛国の精神を児童に身を以て教えることになる」（90頁）との教えが説かれたこと、師範学校の教育内容が教育界に貢献することよりも出征して国に報いることを重視する方向にシフトしたこと、そして下級兵士を経ることなく幹部に繋がる陸海軍の上記登用制度が、将校だけに着用が許される短剣という記号を伴って若き学徒を魅了したことなどが明らかにされる。

実際に将校となった彼らは、学校に残った同級生からは羨望の眼差しを向けられ、自らに寄せられる期待を一層強固なものとして日々を戦う。そして一部の者は帰らぬ人となる。登場人物の一人、吉田信太郎氏は、特攻で命を落とす1週間前から高ぶる気持ちを書き残している（146-151頁）。出撃の予定が二転三転したこと、狙うは空母と決めていること、国のために命を捨てることの誇り、部下や両親への心配り、弟妹を案ずる思い、親戚や近隣への挨拶など、弱冠23歳にして成熟した筆致が涙を誘う。評者も教育に携わる一人として、教育の持つ力の強さは時に危うさとなりうることをあらためて意識させられる。

ところで昭和18年9月に滋賀師範を卒えた彼らの中には、戦場に散った者がいる一方で、無事生還し、初志を貫徹して教鞭を執った者もいた。第5章にはこれら時代の証人たちの回想が収められている。生き残って戦後、教師として人生を全うした者の中には、校長や教育長となって滋賀の教育を牽引した者もいた。級友の命を奪った戦前教育によって教師として育てられ、後にはそれと対立する教えを良しとするその生涯はいかようなものだったのだろうか。そこにも戦争の悲惨さを見て取ることができよう。

さて、複雑な思いに駆られながら読了した今、本書は以下の点で優れていると言える。

なによりも、戦前の高等教育機関に学ぶ個人のミクロな視点に立った生活史をテーマに選んだ点が出色である。教育史は得てして公的な制度史か個別機関の沿革史に偏りがちであるが、そこに集った生徒のライフヒストリーに焦点を絞って当事者たちの声を残そうとしたこと、そしてそれを読みやすい一般書の形で提供しようとした発想が素晴らしい。仮に本書を大学で教材として用いれば、これ一冊を契機として学生を大学史（教育史、教員養成史）、近現代史、地域学などの世界へといざなうことが可能となる。

国立大学の前身校である旧制の師範学校や専門学校の実際、とりわけ、そこに学んだ若者と戦争との関わりについて直接知る人の多くは、今や90歳を超えている。それらの人々による証言は、大学史を編纂するうえで極めて貴重な一次史料となりうるが、戦前を知る彼・彼女らとは近い将来会えなくなるのである。至極当然なこの事実を早くから認識して、卒業生が保存する史料の継承やオーラルヒストリーの収録に務めた著者に敬意を表したい。

けれども、学校と生徒の歴史を残すことの大切さを訴える点で立派な本書にも、次のような課題が見出される。

第一に、著者がなぜ昭和18年の卒業生を題材に選んだのかが釈然としないことである。例えば戦争の悲惨さに主眼を置いて戦死者の数に着目すれば、昭和18年卒業生のうちの16名よりも、遡る3年間のほうが多い（あとがき、183頁）。また、戦争と教員養成との関わりを批判的に訴えようとするのであれば、例えば終戦前後の混乱期の、滋賀師範における教育が正常に機能しなかったとされる世代、つまりは昭和18年以降の入学生が、満足な教育を施されることなく教壇に送り出され、戦後教員として勤務する中でどのような苦労に直面したのか、という点からも描くことは可能であった。

このような中、著者は昭和18年卒業生を取り上げる理由として、同年、師範学校が官立化し旧制専門学校相当の高等教育機関へと格上げされたことを重く見る（15-18頁）。そしてこの制度変更に伴い、師範学校の卒業生が、それ以前であれば高等教育段階の学校を卒業した者のみを受け入れていた陸軍特別操縦見習士官および海軍飛行専修予備学生募集の適用対象となったと嘆く。つまり国の都合によって、学校教育と戦場とが地続きとなってしまったという、その不遇さに着目しようとするのである。

しかし、著者が重視するこの点（17-18頁）には、①官立移管と昇格に係る大正期からの議論、②教員及び教員志願者の払底、③思想国防の発揚と国民学校の発足、④昇格に伴う修業年限の延長、⑤従来、師範学校には猶予されていた修業年限短縮措置の適用など、様々な事情が重なり合っている。当該箇所は本書のテーマ設定の根幹であるため、上記①～⑤等について、絡み合った糸を解くような緻密な整理が求められるはずであるがそれが十分でなく、師範学校制度の改革と特攻とを短絡させた感が否めない。「師範学校の学制改正はやはり軍の都合にあわせて施行されたのです」（18頁、傍点評者）と断言する手前に詳細な実証が必要であろう。

次に、書名と内容とに若干のずれを感じた。本書の内容からすれば、『滋賀師範生の戦時下』、

あるいは『戦時下の滋賀師範生』と銘打つのが適当ではなかったか。仮にも今のタイトルで刊行するのであれば、戦時下における学校内部の様子にもう少し紙幅を割くべきではなかったか。例えば、外国語科目の扱われ方、服装（制服）や食生活の変化、入試問題の移り変わり、学校報国団の組織構造など、戦時下の学校がどのような点で変質していったのか、後世に伝える話は多々あるように思う。とりわけ、官立移管後は同一の学校となった師範学校女子部において、昇格後に男子と同様の移行措置がとられたのか、また、女子生徒がどのように戦争を受容して銃後の護りを固めていったのかについても、本書のタイトルがカバーしてよい事柄である。

また、師範学校に学ぶ者の呼称は、県立の時代も官立移管後も一貫して「生徒」であったが、なぜ「学生」という表現を用いたのかも気になるところである。

だが、これらの課題を認めるにせよ本書はなお輝きを放つ。その学校に実際に通った者しか知り得ないことは多く、そうした人々からの証言や記録が大学史を形作るうえでいかに大切であることか。一例として144頁に掲載された写真に触れておきたい。志願兵として出征する前に開かれた宴の様子を写した一枚である。並ぶ酒器や料理のその前には蛙の置物が飾られているのではないか。“無事カエル”の蛙である。これが、お国のために命を捧げると誓う彼らのもう一つの本心であったのか、今となっては確かめることが難しいのである。この事実直面する時、大学アーカイブズとして学校の来し方を記すことの重要さが一層、今日の大学に生きる我々に迫ってくる。

最後に、戦中の前身校の貴重な記録である本書が、当の滋賀大学によって編まれておらず、滋賀県平和祈念館という学外の組織によって上梓されていることについて、読後しばし考えさせられたことを書き添えておきたい。

【参考文献】

- ・宇都宮大学教育学部史編纂委員会（1989）『宇都宮大学教育学部百十五年史』。
- ・川崎源（2001）『滋賀大学教育学部百二十年史』滋賀大学教育学部同窓会。
- ・作道好男・作道克彦編（1985）『岐阜県の師範学校：その歩みと岐阜大学教育学部』教育文化出版。
- ・百年史編集委員会編（1981）『百年史：千葉大学教育学部』百年史刊行会。
- ・逸見勝亮（1972）「戦時体制下における師範学校政策の展開に関する一考察」『北海道大学教育学部紀要』第19号，111-126頁。
- ・文部省（1972）『学制百年史』帝国地方行政学会。
- ・横畑知己（1987）「1943年『師範教育令』に関する一考察：師範学校昇格運動とその思想」『教育学研究』第54巻第3号，12-21（258-267）頁。